

“Die Abendstunde eines Einsiedlers” についての 哲学的考究

野田彦四郎

A Philosophic Inquiry into *Die Abendstunde eines Einsiedlers*

Hikoshiro NODA

Karl von Raumer pointed out in his book, *Die Geschichte der Pädagogik vom Wiederaufblühen Klassischer Studien bis auf unsere Zeit, Zweiter Theil* (1947), that Pestalozzi's work, *Die Abendstunde eines Einsiedlers*, is not only the result of his past life he has spent, but also the seed of his future life ; in other words, it is both the long-term program of his educational achievements and the key to them.

Moreover, Karl Schmidt (1891-1956) admired Pestalozzi for his idea and literary style in his book referring to it as “Goldkörner in silbernen Schalen.”

Because of his excellent educational practice and his voluminous works, we have had quite a large number of studies and researches on his achievement in education. But I believe we have ever had very few studies on his philosophic inquiry. For this reason, I deal with *Die Abendstunde eines Einsiedlers* in this article, attempting to study in detail his speculative, empirical and practical idea.

I intend to develop my theory about his idea in the following manner.

1. The real picture of Europe, including Zürich, in the days when the book was published
2. The way he studies about what a man is
3. A comparative study with Immanuel Kant
4. The difference between the philosophy of Pestalozzi and that of John Dewey
5. A comparison between the philosophy of Pestalozzi and that of George Wilhelm Friedrich Hegel
6. His view of Nature
7. The Immanent principle and the transcendent principle
8. What he thinks is true

緒 言

Die Abendstunde eines Einsiedlers (「隠者の夕暮」) の価値について、Karl von Raumer は *Die Geschichte der Pädagogik vom Wiederaufblühen Klassischer Studien bis auf unsere Zeit, Zweiter Theil* において「それはペスタロッチーの過ぎ去った生涯の結果であるとともに、また来るべき生涯の種粒でもある。即ち彼の教育学的仕事のプログラムでもあり鍵である」^{かぎ}と述べている。また

karl Schmidt はこれを評して「銀わんに盛れる金粒」⁷⁾ と言っている。

古来、ペスタロッチーの教育業績について叙述したものは、彼の教育実践並びに著述が豊富であったために、その数もまた相当に多いが、これに比して彼の思想について哲学的観想をなしているものは、そう多くはないと考えられる。そこで私は彼の著作の中から「隠者の夕暮」を採りあげ、その哲学的考究をなし、彼の根本思想を明らかにしようと努めたのである。

Die Abendstunde eines Einsiedlers 出現の頃のヨーロッパ 並びにチューリッヒの歴史的現実

ペスタロッチーが「隠者の夕暮」(以下本書という)を公けにしたのは1780年、そしてその翌年、1781年2月には *Lienhard und Gertrud* を公刊している。これは彼が36歳の時で、同年3月、カントが57歳でその主著 *Kritik der reinen Vernunft* を世に出している。

18世紀のヨーロッパにおいては、じつに近古の思想、政治、社会の基調となった根本概念の Illuminism (啓蒙主義) が最高潮に達し、ここに従来の伝統を顧みずして、いたずらに純理を追求することをその特質としていた。

即ち中世以来の旧思想を排撃し、旧制度を破壊し、事物の真相を究め、合理を探求し、正義と人道を高唱したのである。1783年、ヴェルサイユ条約において、イギリスはアメリカ合衆国の独立を承認し、五大湖以南、ミシシッピ河以北の地を与え、続いて世界史上最大にして最高の大革命 *Französische Revolution* は、自由・平等・博愛を宣言して勃発した。

シュプラランガーはその著 *Pestalozzis Nachforschungen* において、ペスタロッチーがこのフランス革命を重要な契機としてその思想を次のように特徴づけるに至ったと叙述している。

Zeitgeschichtlich ist diese Schau zu deuten auf die Krisis der Französischen Revolution. Man mu sich erinnern, da Pestalozzi erst 1792 (in einem Brief an Emanuel v. Fellenberg vom 19. November) endgultig von der Hoffnung Abschied genommen hatte, man konnte die alten patriarchalischen Verhältnisse zwischen Regierung und Untertanen durch die Mittel, die in den beiden Fassungen von "Lienhard und Gertrud" entwickelt waren, wiederherstellen.

上文に示すように、ペスタロッチーが「リーナハルトとゲルトルド」の中で追求したような仕方で支配者と民衆との間の家長的関係を再建することができるという観測から決定的に決別するに至ったこと²⁾、そしてそれは1792年であり、彼をしてそうさせた最重要の契機こそはまさしくフランス革命であるとしている。

このシュプラランガーの見解は正しいと考えられる。そしてこのような観点からすれば、「隠者の夕暮」はこの決定的な決別以前の伝統的な古い家長的君臣関係、主従関係の回復を理想としていた時代のものであり、彼の学的生涯を1792年の分水嶺をもって二期に分けるならばその前期の思想を代表する著作と称することができると思うのである。

ひるがえって、スイスの歴史もまたヨーロッパ各国の民主化の波とともに緩慢ながらも地道に New Era への進行を続けていた。即ちペスタロッチーの祖国においても、1336年のチューリッヒ市契約書に始まり、1373年の同契約書改正、更に引き続いて1393年の改正に及び、遂に1798年の統一スイス国家の憲法成立をみるにいたるのである。

彼がその著、「わが祖国の自由について」において、チューリッヒ市の憲法にしばしば言及し、かつこれを誇りとし、憲法精神を国民に浸透しようと教育していることは、現実の歴史的事実を直現して、新しい市民の育成にひたすらに邁進した彼の炯眼と称すべきであろう。

ペスタロッチーは人間をどのように考究しているか

「隠者の夕暮」は「玉座の上にあっても木の葉の屋根のかげに住まっても同じ人間、その本質から見た人間、そも彼は何であるか」の冒頭の至清、至剛の至言より次のように書き下されている。注。以下、(1)、(2)、など()で示す数字は、本書中の各条の番号を表わすものである。

- (1)・Der Mensch, so wie er auf dem Throne und im Schatten des Laubdaches sich gleich ist ; der Mensch in seinem Wesen, was ist er?

そして、「何故に賢者は人類の何ものなるかをわれらに語らぬのか、何故に気高い人たちは人類の何ものなるかを知らぬのか。農夫でさえ彼の牡牛を使役するからにはそれを知っているではないか。牧者も彼の羊の性質を探求するのではないか」と鋭く喝破している。

本書が人間探求の最初の重要証言であると称せられるゆえんもまたここにあると言わねばならぬ。これはあたかも、カントが *Kritik der reinen Vernunft* において「人間とは何であるか」の究明に力を尽したことに相通ずる哲学の大命題への追求というべきであろう。続いて彼は、次のように提言する。

- (2)・Und ihr, die ihr den Menschen brauchet und saget, daß ihr ihn hütet und weidet ; nehmet auch ihr die Mühe des Bauren für seinen Ochsen?

「なんじら、人間を使役し、そしてこれを護り、これを牧すと称する者よ、なんじらもまた農夫が彼の牡牛に対するような労苦を払っているか。なんじらの知恵は人類についての知識であるか、またなんじらの親切は国民の聡明な牧者のもつ親切であるか」と問い、(3)・において、「人間の本質をなすもの、彼が必要とするもの、彼を高めるもの、そして彼を卑しくするもの、彼を強くしたり弱くしたりするもの、それこそ国民の牧者にも必要なものであり、最も賤しい小屋に住む人間にも必要なものである」と強調している。そして(119)・において、「どんな低い地位にあっても、婢僕はその主人と本質において同じであり、その主人は婢僕の本性の要求を満足させる責めがある」と明言し、(120)・には、国民を教化して彼の本質の淨福を悦樂するようにするためにこそ、人民の長たる父があるのである、としている。(122)・に及んでは、「人類のあらゆる淨福への期待は一箇の夢なのか、また彼等の幼な児のような希望は彼等の低い地位における仮睡と懦弱との幻像なのか」と追求している。

また人間と環境については次のように述べている。

- (13)・Diese Menschenweisheit, die sich durch die Bedürfnisse unserer Lage enthüllet, stärkt und bildet unsere Wirkungskraft und die Geistesrichtung, die sie hervorbringt, ist einfach und fest hinsehend, sie ist von der ganzen Kraft der in ihren Realverbindungen feststehenden Naturlagen der Gegenstände gebildet, und daher zu jeder Seite der Wahrheit lenksam.

「われわれの境遇上の要求から現われてくるこの人間の知恵は、われわれの活動力を強め、かつこれを陶冶する。そしてこの人間の知恵のもたらす精神の傾向は単純でもあればまた凝視的である。この知恵は現実的の關係のうちに確立している事物の自然状態の全体の力によって形作られるので真理のいかなる方面にも向けることができる」としている。

上記により、人間について単に外から見るのではなく、同時に内からみることの必要性を述べていること、人は外延的に考えられると同時に内包的に考えられる存在であること、そして更に環境から孤立した単に内面的主観的存在ではなくして境遇との必然的関連の中に立つ時間的、空間的、具体的存在であることを明示している。そしてこのことは彼の名著である *Nachforschungen*（「探究」）における次の三種の人間相においてより精細により鋭く深化されているものとの重要な関連のあることを知るのである。

◎*Nachforschungen* における三種の人間相

Relative ⁵ (selbstsuchtig)	}	(I) Natur-Mensch. (Kinderjahre) Naturzustand, als Werk m. Natur, Gesetzlosigkeit Anomie, Sinnengefühl, Sinnengenuss, Instinkt, Unglaube.
	}	(II) Gesellschaftliche-Mensch. (Junglingsjahre) Gesellzustand, als werk m. Geschlechts, Fremdgesetzlosigkeit, Heteronomie, Wohlwollen, Behaglichkeit, Gesellverhältniss, Sektgeist.
Absolute (sittlich)	}	(III) Sittliche-Mensch. (Mannalt-Meisterjahre) Sittlicheszustand, als werk m. selbst, Selbstgesetzlichkeit, Autonomie Liebe, (Gottessinn) Segen, Gewissen, Glaube.

彼は、上のように人間の三状態として、自然状態、社会状態、及び道德状態の諸相を挙げ、これら三状態の間の推移と発展、調和と統合を目ざすところに、そして更にまた、人間における感性的なものとの神性的なものとの「心の内なる義の感⁵⁾」によって統合することを志向するところに、「人間の本質」が存するとの信念を抱いているのである。

Immanuel Kant の哲学との比較考察

私はすでに (13) ・を引用し、彼が、われわれの知恵は現実の關係のうちに確立している自然状態の力によって形作られるので、真理のいかなる方面にも向けることができると述べていることを明示したが、このことは更に次の事項を見ると、一層明確となる。

(14) Kraft und Gefühl und sichere Anwendung ist ihr Ausdruck.

Erhabene Bahn der Natur, die Wahrheit, zu der du führest, ist Kraft und That, Quelle (der) Bildung, Fullung und Stimmung des ganzen Wesens der Menschheit.

彼は純粹の人間の知恵は、自分を取りまく事柄を立派に処理する育成された能力の確固たる基礎の上に立ち、上記のような力となって現われ、感情となって現われ、また確実な応用となって示現するという。これに反し、カントは *Kritik der praktischen Vernunft* には次のように述べている。

Das formale praktische Prinzip der reinen Vernunft, nach welchem die blosse Form einer durch unsere Maxime möglichen allgemeinen Gesetzgebung den obersten und unmittelbaren Bestimmungsgrund des Willens ausmachen muß, das einzige mögliche sei welches zu Kategorischen Imperativen d.i. . .

即ち、「なんじの意志の格律がつねに同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行為せよ」の定言命法である。このカントの場合においては、上述の(13)・(14)・に明らかないっさいの *Neigung* (傾向性) は否定されなければならない。彼の説く純粹実践理性は欲求能力の実質としての快あるいは不快の表象なしにただ実践的規則の単なる形式によって意志を決定するものでなくてはならない。カントのこのような考え方は感性を軽視することによって、かえって形式的・虚礼的な道德観を生み、いたずらに禁欲主義を導き出すことになる、という意味でプラグマティストの批判を受けざるを得ない⁷⁾。これにひきかえ、ペスタロッチーはいっさいの *Neigung* を否定するどころか、かえってそこに道德的行為の淵源を上述のように見出している。これは確かに両者の哲学の懸隔^{ほんかく}であると考えられるのである。

John Dewey の哲学との相違

本書の(154)・には、「人類の総ての力は神性に対する信仰によってただ浄福だけを生む。しかも総ての国民の浄福のこの唯一の源泉たる君主の親心は神に対する信仰の結果である」と述べ神に対する信仰があらゆる国民道德の根幹に培う生命の泉、理想国家成立の基礎であると示している。このことに関連し、デューイは *The spirit of American Philosophy* (1963) には、次のように述べられている。

The pragmatists, and not least Dewey himself, were often criticized for emphasizing only the surface of life, the immediate and the practical, the material and the mundane, neglecting the loftier dimensions of man's life and experience. Unlike James, Dewey did not have an intimate sense of the transcendent ideal from which religion draws its life, although his *Common Faith* proved to be a most provocative book on the subject. Ideal meaning for Dewey was centered not in religion but in art.

プラグマティストたちはデューイ自身をも含めて、彼らは人生の表面のみ、眼前の実際的な物質的世俗的な事柄のみを強調し、人間の生命と経験のより高い次元を無視している、との理由でしばしば批判された。デューイは宗教がそこからその生命を導き出す超越的理想について親しい感覚を持たなかった。もっとも彼の「誰でも信仰」は宗教について極めて挑発的な書物であることが証明されたが、デューイにとって理想的意味は宗教ではなくて芸術に集中された⁸⁾。

ペスタロッチーは、もっぱらデューイの上記のような態度であるのに対し、人格哲学的基礎そのものに思いを馳せ、そのために、終生、奮闘したのである。この人間性に対する信仰の基盤を確立したという点では、彼の功績の右に出るものはないとさえ考えられる。

Georg Wilhelm Friedrich Hegel の哲学との対比

ヘーゲルは絶対精神について *Die philosophie des Geistes* に次のように叙述している。

Der absolute Geist ist eben so ewig in-sich-sehende, wie in sich zurückkehrende und zurückgekehrte Identität; die Ein und allgemein Substanz als geistig, das Urteil in sich und in ein Wissen, für welches sie als solche ist. Die Religion, wie diese höchste Sphäre im Allgemeinen bezeichnet werden kann.

「絶対精神は永久に自己の中に存在している同一性であると同様に自己内へ復帰する、そして復帰せる同一性である。絶対精神は精神的実体としての唯一にして普遍的な実体であり、自己と知とへの判断（根源的分割）である。そしてこの知に対しては、実体は実体として存在している。この最高の領域は一般に宗教として記号されることができる。そして信仰は客観的真理の確実性であって、精神存在の証しである。信仰はこの直接的統一である⁹⁾と述べている。

このように、ヘーゲルが神を調和とみる思想や信仰は、まさにペスタロッチーの思想の根底に一貫して流れるところの精神である。敢て言えば、ペスタロッチーの全思想体系の神髄とは、じつにこの統一調和の原理に外ならぬと思惟されるが、それが上に述べたヘーゲルの絶対精神とそのみなもとをひとしくすると考究されるのである。

ペスタロッチーの自然観について

ペスタロッチーの思惟において最も重要な役割を演じているのは「自然の概念」である。この概念は彼の経験の深まりゆく思索を通じて発展している。彼の自然観はルソーよりの多大の影響を受けて成立する。彼の「自然」はヘフデング（1843-1931）も言うように、1. 神学的概念、2. 博物学的概念、3. 心理学的概念の三つを含んでいる⁷⁾が、彼の思想の基調をなすものは3. である。人間の自然の自己発展について彼は本書（32）・に「自然の力よ、人類の純粹の陶冶よ、なんじは一体、いずこにいるのか」と開披き、人間は本能的要求ないし傾向の自然状態より、自己内部からの発展を求め力を持っているとなし、また（20）・には「生活の立脚点よ、人間の個人的使命よ、なんじは自然の書で、なんじのうちには自然というこの賢明な指導者の力と秩序とが横たわっている」と指示し、さらに（54）・には「人間よ、なんじ自身、なんじの本質となんじの諸力との内的感情こそ、陶冶する自然の第一の主題である」として次のように述べている。

(54) Mensch, du selbst, das innere Gefühl deines Wesens und deiner Kräfte ist der erste Vorwurf der bildenden Natur, aber du lebst nicht für dich allein auf Erden. Darum bildet dich die Natur auch für äussere Verhältnisse und durch sie.

そして（22）・には「自然の力はたとえそれが抵抗できない強い力で真理へ導くとはいえ、その導きのうちには少しも窮屈なところがない。鶯のうぐいすの聲が暗いやみの中に響けば自然の万象はさわやかな自由のうちに動き立って、いずこにもさし出がましい秩序の陰影は見られない。」と説き、

(42) Ordnung der Natur in der der Bildung der Menschheit ist die Kraft der Anwendung und Ausübung seiner Erkenntnisse, seiner Gaben und seiner Anlagen.

(42) においては「人間の陶冶における自然の秩序は人間の認識と天賦と、そして素質と

を応用し実行する」となし、(43)・には「だから単純にして無邪気な人は自己の認識を純に、また素直に応用し、かつ静かな勤勉に頼って自己のあらゆる力と素質とを練習し使用することの成果として、自然によって真実の人間の知恵に達することが、できるように陶冶される。ところがこの自然の秩序を自己の心の奥底において攪乱し、かつ自己の認識の素直さの純粋な感じを弱める人は真理の浄福を味わうことができない」としている。このことは(26)・及び(27)・の「自然の陶冶のうちには世帯持ちのような精密さがある」と呼応している。

彼はこの考えを *Nachforschungen* において一層深化し、人間には二つの本質的側面、即ち自然的動物的側面と道徳的精神的側面が思惟されるが、これらはそれぞれ現実的に在るのではなくて本来的には非現実的であると述べ、本質可能的な限界状況の間の存在のみが現実的に可能であると説いている。彼はこの中間の状態を自然と呼び、この状態においてわれわれが自己を本質化しようとする絶えざる努力を自然の歩み⁷⁾ (*Gang der Natur*) と称している。さらに(55)・において

(55)・ So wie diese Verhältnisse dir nahe sind, Mensch! sind sie zur Bildung deines Wesens für deine Bestimmung dir wichtig.

「なんじは地上において自分一人のために生きているのではない。だから自然はなんじを外部との関係のために、また外部との関係によって陶冶する」と、このようにしてわれわれ内部の本質的萌芽とその発展の秩序ならびに発展の場となり、発展を促進するところの外的・必然的現実もまた自然であると論じている。これを要するに彼の理念的意味における自然は外的・有機的自然と人間的・精神的自然との可能的な統一存在である、と把握されるのである。

内在的原理⁸⁾ (Immanent Principi) と超越的原理 (Transcendent Principi) について

本書の底には深い宗教的信仰が脈々と流れている。彼は神について1. 内在的原理と2. 超越的原理の二つの契機があると考え。1による神を内在神とする考えは次の(35)・に明らかである。

(35)・ Deshalb ist ausgebildete Kraft der Menschheit diese Quelle ihrer starken Thaten und ihrer ruhigen Geniessungen kein eingebildeter Drang und kein täuschender Irrthum.

上記は、「われわれの本質の奥底における満足よ、われわれの本性の純粋な力よ、なんじ人生の浄福よ、なんじは決して夢ではない。なんじを求め、なんじを探究することは、人類の目標でもあれば使命でもあって、しかもまた私の要求でもある。」、また(87)・には、「なんじの父がなんじの本質をなんじの心の奥底において強め、なんじの日々を朗らかにし、苦痛に対するなんじの力を向上させ、そしてなんじ自身のために心の奥底において浄福の味得の優越なことを示すならば、その時こそなんじは神の信仰に到る自然の陶冶を味得するであろう。」と語り、さらに(85)・にも「人間の藁屋の中に神は父親としてましますこと、——私の本質の奥における神、その賜とそして私の生活の悦楽との贈与者、それこそ人類をこうした信仰へと陶冶するものであり、あらゆる信仰を悦楽と経験との上に築く力である」など、これらの例は、彼が自我をもってあらゆる文化の創造者と考え、しかもその自我の本質を自発性それ自体であると考へた**文化の原理**としての**内在神**を捉えていた一面と思われる。これに対し2.にもとづ

き超超神に近いと考えられる記述は (110) ・ (111) ・ (112) ・ (115) ・ ……など随所に見られるが代表的な条として (160) ・ を挙げるならば次の通りである。

(160) ・ Band der Vereinigung der Menschheit zu ihrem Segen, Glauben des Fürsten und seines Volks an den obern Herrn der Menschheit Glauben Gottes, du bist es allein, der die Menschheit vor dieser Klippe sichert.

即ち「人類を彼等の浄福に結びつける紐帯^{ちゅうたい}、人類の最高の主に対する君主とその国民との信仰、神の信仰、なんじは人類をこの断崖^{がいの}から守る唯一のものである」と。論者、あるいは言う。彼の思想は本書を著述する頃は多くは1に属して、1800年頃、彼が「白鳥の歌」を公刊する頃において、「宿命論的信仰」の兆しを示すころ、2の方への転移が顕著である」と。

さらに理論を展開するならば (73) ・ には「神は人類に最も近い関係である」と掲げている。これは彼が神は外延的に考えるならば最も遠い関係であるが、内面的・精神的な関係においては最も近いと信じていたことに基づくのである。彼はまた、(105) ・ 「親心と子心、なんじの家のこうした浄福は、人間よ、信仰の結果である」とか、(107) ・ 「神の子である私の父に対する信仰は、神に対する私の信仰を陶冶する」、その他、本書を哲学的に考究するとき、つねに彼の問題は「人間の本質の探求」という根本問題に帰一せしめられている。既に考察を進めてきたように、彼は神への信仰なしには人間のあらゆる幸福の源がたち切られると力説しているが、しかし彼の言う神はじゅうぶんに人間中心的な観点において考えられている。さらにキリストは人間の継続発展の相として存在し、われわれ人間の理想のすがたとして考えられている。このようにして、人間が道德完成の理想にまで自己を高めること、そこに彼は宗教を見出している。以上、論述し来ったペスタロッチーの宗教観は彼の最重要観念としての人間中心主義からあふれ来った当然の帰結と言うべきであろう。

真理についてのペスタロッチーの確信

われわれは本書において、真理・経験・浄福・無邪気・幸福・神の言葉がしばしば使用されているのを見る。けだし、これらの言葉は彼の思想の象徴と考えられるべきものであるからであろう。そしてその根本においてはこれらの思惟の基盤となっている「調和の原理」(das Prinzip der Harmomie) が据え置かれている。ここに述べる真理も前述の自然とともに彼の思想把握の鍵とも言うべきもので、これらの二概念は、彼の思想の出発点であるとともに帰着点であるからである。彼において真理とは (9) ・ が示すように「真理がなんじにとって安らぎと平和とともに必要なものであるように、人間よ、それがまたなんじにとってなんじの最も手近かな幸福において、確かな導きの星であり、かつまたそれがなんじの生命の休らう支えであるように、それはなんじにとって浄福である」と称すべきもの、即ち「自己の全生命が認容する絶対的信頼性をもつところの生活力」を意味するものである。そして (31) ・ に言うところの「真理への人間の陶冶よ、なんじは人間の本質と人間の本性とを導いて、われわれに安らぎを与える知恵へと陶冶する」ものであり、さらに (12) ・ に示すように「純粹の真理感覚は狭い範囲で形造られる。そして純粹な人間の知恵は彼に最も近い関係の知識並びに彼に最も近い事柄を立派に処理する練成された能力の確固たる基礎の上に立っている」のである。真理はまた次の (15) ・ に叙述するように。

(15) ・ Kraft und Gefühl und sichere Anwendung ist ihr Ausdruck.

Erhabene Bahn der Natur, die Wahrheit, zu der du führest, ist Kraft und That, Quelle (der) Bildung, Füllung und Stimmung des ganzen Wesens der Menschheit.

「なんじが導きゆく目標である真理は高貴なる自然の道であり、力であり、行いであり、陶冶の源泉であり、人類の全体質の充実であり整調である。」、しかもペスタロッチーは真理を体得する主なる方途として第一に「真理は自己の経験を通し、あるいは生活によって人生の力または自信として獲得されるもの」であり、第二には「自己の境遇の必要性によって得られるものである」と説き、更にまた「神の信仰によって、人間は知恵と恵福とが与えられるのであって、これが即ち「真理への教育」「自然の道の教育」であると明言しているのである。

結 語

私はすでにペスタロッチーの *Die Abendstunde eines Einsiedlers* について、これを西洋哲学史上の三大碩学の理論と比較考究し、更に本書の哲学的内容については、自然、神、真理の三大概念を採りあげ考究を進めてきたのであるが、かつて H. Morf はその著 *Zur Biographie Pestalozzis Ein Beitrag zur Geschichte der Volkserziehung* においては次のように本書について絶讃している。

Es ist gleichsam sein pädagogisches Glaubensbekenntniss, enthält die erhabenen Ideen und Gedanken, die sein Inneres erfüllten und unter deren Herrschaft er der Welt das geworden, wofür wir ihn so hoch verehren.

即ち、「『隠者の夕暮』は、いわばペスタロッチーの教育上の告白であり、崇高な理念と理想とを含んでいる。その理念と理想とは、彼の内部を満たし、そしてそれをわがものとすることによって彼は世界において、われわれが高く評価するような人物となった。その作は渾然とした精神的全体をなしている」と、Morf の説くところの「渾然とした精神全体」を研究するためには、この小論においては十分に尽くすことのできなかつた「ペスタロッチーの哲学としての調和の原理」ならびに、「イエス・キリストの立場との関係」について、更には、Hegel の名著 *Phänomenologie des Geistes* や Feuerbach の *Das Wesen des Christentums* などと関連づけて精細に探究することは、意義深いことと考える。そして、こうした探究の集積によって本書の真価は哲学的に、いよいよ明白に把握せられると信ずるのである。

文 献

- 1) 岩崎喜一：ペスタロッチーの人間の哲学，37～49，牧書店（1951）
- 2) Pestalozzi，梅根 悟訳：政治と教育—隠者の夕暮，164～182，明治図書（1976）
- 3) 長田 新：ペスタロッチー全集，第一巻，27～30，平凡社（1959）
- 4) 前掲書，第六巻，9～71（1959）
- 5) 坂東藤太郎：ペスタロッチーの道德・宗教教育の研究，32，39，65，協同出版（1962）
- 6) 長田 新：隠者の夕暮・シュタンツだより，1～41，岩波書店（1985）
- 7) 松田義哲：ペスタロッチーの教育思想，33，36，51，55，協同出版（1966）

- 8) John. E. Smith, 松延・野田訳：アメリカ哲学の精神, 200, 玉川大学出版部 (1981)
- 9) Georg. W. F. Hegel, 船山信一訳：精神哲学, 295～296, 岩波書店 (1939)
- 10) Eduard. Spranger : *Pestalozzis Denkformen*, 90～115, Quelle & Meyer, Heidelberg (1959)
- 11) H. Morf : *Zur Biographie Pestalozzis. Ein Beitrag zur Geschichte der Volkserziehung*, 140, Erster Theil (1868)
- 12) Immanuel Kant : *Kritik der praktischen Vernunft*, 50, Felix Meiner Verlag (1977)
- 13) Georg Wilhelm Friedrich Hegel : *Die Philosophie des Geistes*, 446, Frommanns Stuttgart (1958)
- 14) John. E. Smith : *The spirit of American Philosophy*, 157～158, Oxford University Press (1963)